

平成28年度 第1回 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会	
日時	平成28年9月29日(木) 18:20~21:00
場所	南三陸町役場 2階大会議室
次第	<p>(委嘱状交付)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 開会 2 町長挨拶 3 委員紹介 4 協議等 <ol style="list-style-type: none"> 1) 本委員会設置の目的と背景 <ol style="list-style-type: none"> ①南三陸町地域資源プラットフォームについて ②これまでの町の各種計画との関係 ③本委員会の役割と目指す成果について 2) 持続可能な地域についての議論 <ol style="list-style-type: none"> ①持続可能な地域の定義 ②南三陸町の現状・課題・可能性 3) 本日のまとめと次回会議の方向性確認 <ol style="list-style-type: none"> 5 その他(事務連絡等(次回日程、他)) 6 閉会 <p><資料></p> <p>「第1回 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会 次第」</p> <p>「南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会 委員名簿」</p> <p>「資料1-1 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会設置要綱」</p> <p>「資料1-2 これまでの町の計画と本委員会の位置づけの整理」</p> <p>「資料1-3 南三陸町第2次総合計画(抜粋)、人口・経済等の見通しと目標」</p> <p>「資料1-4 南三陸『森里海ひと』の地域資源ブランド推進事業」</p> <p>「資料1-5 南三陸町地域資源プラットフォーム イメージ」</p> <p>「資料1-6 目的とプロセスについて」</p> <p>「資料2-1 南三陸町の現状・課題・可能性(補足資料)」</p> <p>「資料2-2 自然環境活用センターについて」</p> <p>「参考資料 “Center for Alternative Technology”」</p>

出席	<p>●委員（敬称略）</p> <p><出席：17名></p> <p>佐藤太一（FSC/FM）、小野寺邦夫（FSC/COC）、後藤清広（ASC）、 阿部寿一（ASC/COC）、川廷昌弘（FSC 普及）、榎田豊久（バイオマス産業/転換）、 佐藤克哉（バイオマス産業/循環）、工藤真弓（山さございん）、 阿部民子（海さございん）、阿部國博（南三陸農業協同組合）、 阿部富士夫（宮城県漁業協同組合）、松田恭子（学識者）、安藤仁美（公募委員）、 佐藤洋子（公募委員）、最知明広（行政/副町長）、高橋一清（行政/産業振興課長）、 小山雅彦（行政/環境対策課長）</p> <p><欠席：2名></p> <p>高橋長晴（南三陸森林組合）、山内大輔（南三陸商工会）</p> <p>●事務局</p> <p><出席：14名></p> <p>企画課：阿部課長、檀浦室長、太齋係長、阿部主査、松本主事 産業振興課：佐久間参事、氏家係長、及川係長、宮川係長 環境対策課：星補佐、山内係長、佐藤係長 事務局業務支援：山内亮太（株式会社 ESCCA）</p>
-----------	--

＜委嘱状交付＞

＜1. 開会＞

＜2. 町長挨拶＞

町長：委員の皆さんの委嘱期間は2年以内ということでご協力をお願いする。復興計画の復興期と発展期が重なっている時期であり、間もなく復興期が終了となる。今後は持続可能な南三陸の将来についても軸足を置いて考えていかねばならないと認識している。震災から5年半、FSC 認証やASC 認証の取得など、各立場で苦労頂いた経緯がある。環境審議会においては、答申として来年2017年3月の申請期限に向け、ラムサール条約認証取得について町として再チャレンジしよう（志津川湾において取得を目指そうとした矢先に東日本大震災が起り計画とん挫の経緯がある）という提言がなされたので、それに向けても頑張ってもらいたい。委員の皆さんには、南三陸のブランドやそれを地域資源としてどのように育成管理していくかという重要な部分を議論して頂かねばならない。特にそこにつながるものとして、震災前にあった「自然環境活用センター（以下、ネイチャーセンター）」という施設整備の在り方を議論頂くことになるかと思うので、よろしく願いたい。三陸縦貫自動車道が志津川インターまで供用開始となるなど、南三陸町の先行きに希望が見えてきた部分もある中、忌憚のない意見を交わしながら素晴らしい会にしてもらいたい。

＜3. 委員紹介＞

- ・各委員より、一言ずつ自己紹介を頂いた。

＜4. 協議等＞

1) 本委員会設置の目的と背景

①これまでの町の計画と本委員会の位置付けについて

- ・事務局より、資料1-1～1-4に基づき、これまでの町の計画の変遷と本委員会の位置づけ、目的について説明。

②南三陸町地域資源プラットフォームについて

- ・事務局より、資料1-5に基づき、「南三陸町地域資源プラットフォーム」について、行政側の構想を説明。

③本委員会の役割と目指す成果について

- ・事務局より、本委員会の目的を改めて確認し、資料1-6に基づき、全5回を予定して

いる会議の進め方について説明。

委員：委員会の回数について、5回では足りない気もするが、増える可能性はあるか。

事務局：当事業は、地域再生計画として内閣府の認定を受けた事業で、「企業版ふるさと納税」を活用した事業である。約3,000万円という予算（総予算）内で進めていく必要がある。また、今年度事業としては3月末で終了する必要もあるため、5回が限度と考える。今年度中にプラットフォームの在り方をとりまとめ、来年度実現に向けて動きたいという事情もあり、計画どおり進めていきたい。

委員：提言書提出の後、プラットフォームへの委員の関わりについても議論するのか。

事務局：議論していく。その他議論したい内容として、例えば「南三陸ブランド」の定義等がある。2年間の任期であるため、今年度だけではなく来年度事業において委員の方々の関わりについては議論していただく予定である。

委員：5回という限られた回数の中でどこまでの範囲について議論していくのか、という部分も白紙状態という認識でよいか。

会長：その認識でよい。プラットフォームが担う部分が多く、あまりにも重たいものとなつては動きにくくはなるだろうが。

委員：行政側ではどこまで考えているのか。資料1-5の「南三陸町地域資源プラットフォームイメージ」には、プラットフォームは「中間支援機関」と書かれているので、ブランド化を進めていくうえでうまくまとめる、つなげていくための機関をつくるという理解だが。行政側としてどこまで求めるのか。5回で提言するとなると、イメージとしてある程度行政側の考えを共有しておいたほうが良いのではないか。

事務局：委員の皆さんが議論した焦点を事務局側で集約、収束させながら進める。

会長：行政側の考えを前面に出してしまうことで先入観を持たれ、意見が出なくなる状況は避けたく、委員の皆さんからの多面的な意見を聞きながら判断していきたい。

委員：南三陸町の一般の方々のイメージは「海」。ASC認証を受けた牡蠣については、農協の立場で町外に出ても興味をもって聞かれる。一次産業とあるが、もっと「海」を前面に出しても良いのでは。一次産業の産物についてブランド化していくには年月と労力と資金

がかかる。特に農産物は味などでも差が出にくい。そこをブランド化していくことは大変なことだという認識と覚悟を持ちプラットフォームを創っていく必要がある。

委員：認証を取得したという事実をどう活かし広げるのか、一次・二次・三次産業とその価値を高めながら、人も金も心も回るような展開を目指し議論できればと思っている。

委員：外側から南三陸町を見ている立場として発言する。プラットフォームを作って誰に何を売りたいのかも大事である。企業に売りたいのか、個人に売りたいのか、町には来ない人々に売りたいのか。震災後、日本全体が持続可能性や、自然と共に生きることの大切さに気付いた。そして外側から見ると南三陸で起きていることが注目され手本にされている。これまでは頑張っても到達しなかったことも、震災後注目され、手が届いてしまう面もある。南三陸の町の皆さんには責任がある。南三陸の社会的責任とも言える。南三陸は分水嶺が町境という希少な環境を有し、町の中で完結して議論ができる恵まれた地域。そこでプラットフォームをつくろうとしている。ターゲットによって打ち出すメッセージは変わってくるだろうが、委員の皆さんが思うより良い思いを出せば、良い形が目指せる。

事務局：会議の回数は足りなければ増やすことも検討させていただくが、なるべく効率的に議論していきたい。

2) 持続可能な地域についての議論

- ・ 2) においては、ワークショップ形式で議論を行った。

①持続可能な地域の定義

- ・ 事務局がファシリテーターを務め、各委員から意見が出された。以下、別紙1-1、1-2参照。

- ・ 捕捉的に以下のやりとりがなされた。

事務局：南三陸町の強みとは何か。一次産業総生産額が減ることについてはどうか。

委員：一次産業の総生産額は減って担い手が減っていても、各自の所得があがっている。また携わりたいという人が増えている。南三陸町は自然資源が豊富。その環境に依存して担ってきた人がほとんどだが、限られた漁場の中、人口が減れば逆に活用できる範囲は増えチャンスが広がる面もある。

委員：漁業も担いながら農業も行っていた人は多かったが、震災後その姿は崩れ、海岸沿いの農地が担い手不足で荒れている。こうした農地を活かせるような対策が必要。自然環

境を守るためにも、産業を維持するためにも担い手不足の課題を解決する必要がある。

委員：農業の大規模化で機械化すれば大きな面積も扱えるが、この地域にその方法が沿うかどうか。一方一人で担うのが良いかというところでもない。

委員：大きな面積を少人数でやろうという動きもあるが、農地を守りたいという想いだけで動いている部分もありコストを考えると割に合わず持続しない。さまざまな人と一緒に動く、町全体の環境を変えていく力がないとできない。

事務局：限られた漁場、限られた農地というのは当たり前の状況ではあるが忘れられがちな点。漁業の空いた穴には新規参入したいという人も出てくる。しかし参入者より流出する人数が多い。

委員：若い人たちが町を出ていくのは働く場所がないから。働く場所が漁業と農業に限られると多様性がなく、店などの商業地などがなければ働く場所がなく出て行ってしまう。どうすればよいのか。

委員：漁業も農業も資金的に生活していけないため継げないと出ていく若者もいる。収入を上げられる工夫が必要。

委員：町外から人を寄せてこなければ。

事務局：あるものをどう魅力的に見せていけるか。しくみが作れるか。ベースは農林水産業という一次産業である。それをどのように魅力的にしていくか、どのように価値をあげていけるか。

委員：荒れた農地は何か活用できれば。田んぼ以外にも活用できる道があれば。

委員：南三陸ならおもしろい農業ができるかもしれない、というような見せ方ができれば、外から人が来るかもしれない。

委員：ストーリーが大事。ひとつひとつの規模は小さいがつながり易く、つながることによって大きなものとなる。FSC、ASCも単体だと弱い。2つがつながることによって発信力を増す。そのストーリー価値を発信し、その可能性に人は集まってくる。連環こそこの町の強みではないか。

②南三陸町の現状・課題・可能性

・事務局がファシリテーターを務め、各委員が「できていること、できていないこと、可能性」について色の異なる付箋に書き出し、「山・里・町・海」の領域に分類して整理した。以下、別紙2-1、2-2参照。

3) 本日のまとめと次回会議の方向性確認

委員：これだけの可能性が出せるということは、南三陸町は志が高い人が多いのだと思う。ひとつひとつの芽をこれからつなぐうえで、例えば伐採された木がそのまま放置されているから台風の時に流れてしまう問題について、志の高い人が地域に広げるときに、「だからやめよう」ということでは解決は難しい、「この木だってもったいない」と言って回収できるようなことを“しくみ”としてつくる、そこが成功につながるのでは。そのモチベーションを上げていくことによって地域全体に芽が広がっていく。志の高さで攻めるのではなく、ここから先はモチベーションでまわしていくというところに何かヒントがあるのではないか。

委員：課題は可能性になる。やり方さえ変えれば課題も可能性として生きてくる。

事務局：民間がやるべきところと行政がやるべきところはどこか。それに対しどちらでもない部分はどこか。そこをプラットフォームが担うのか。どのようにやるのか。皆がモチベーションをもって行うにはどうすればよいのか。継続性ある動きにするにはどうすればよいのか。次回はそれらについても議論を進め、プラットフォームがやるべきことを整理したい。

委員：持続可能で経済的な価値を推進していくような後押しは行政しかできない。例えばゴミ処理そのものとなると行政が担う部分、しかしその処理方法については行政が背中を押す領域。

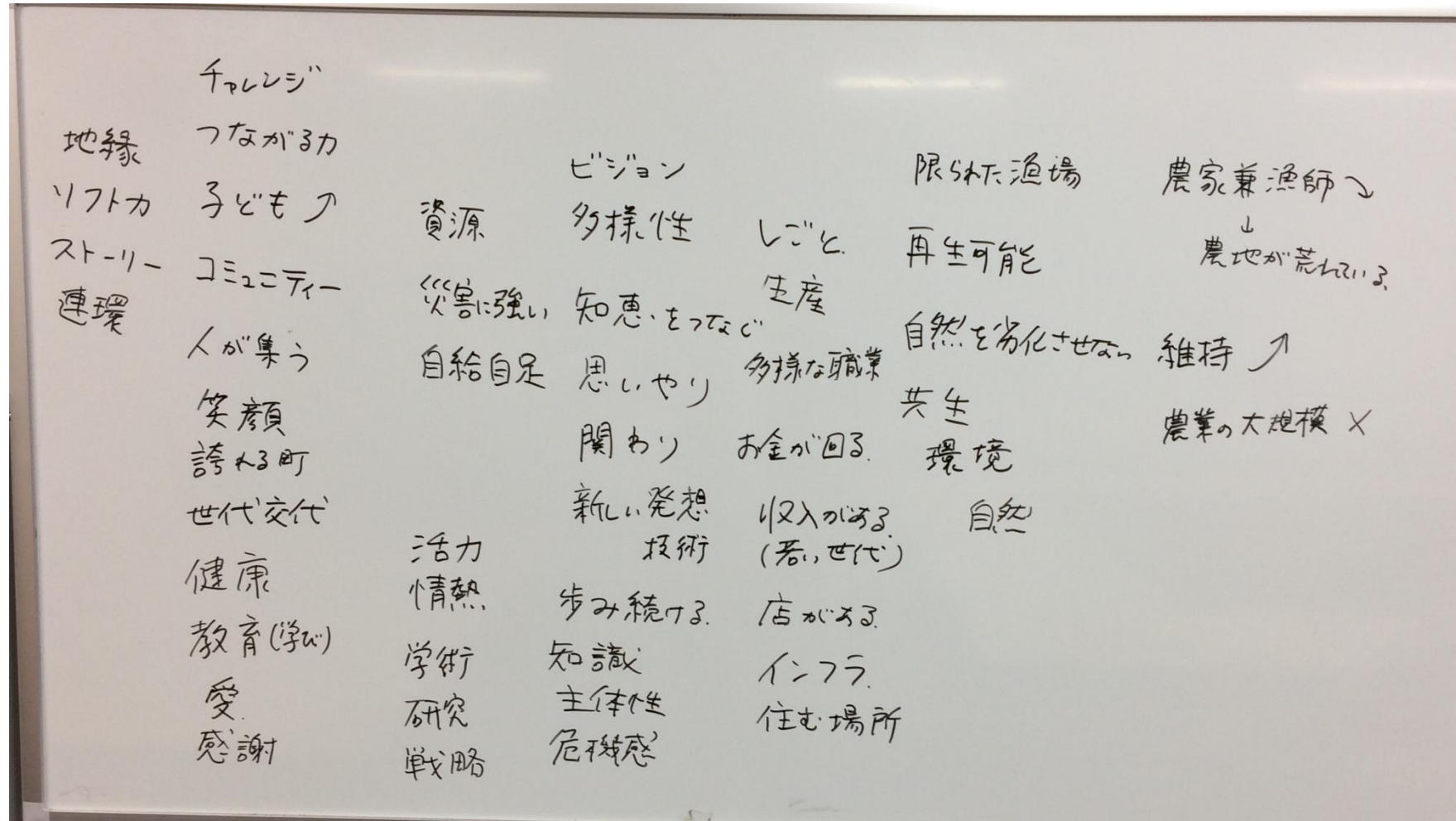
委員：若い人の中で漁業に興味を持つ人がいた場合、そうした若者が生活するための環境整備などは、国の担い手支援関係の事業を活用するなどして行政側が後押しできる領域だろう。

< 5. その他（事務連絡等（次回日程、他）） >

< 6. 閉会 >

以上

別紙 1-1 持続可能な地域の定義 (写真)

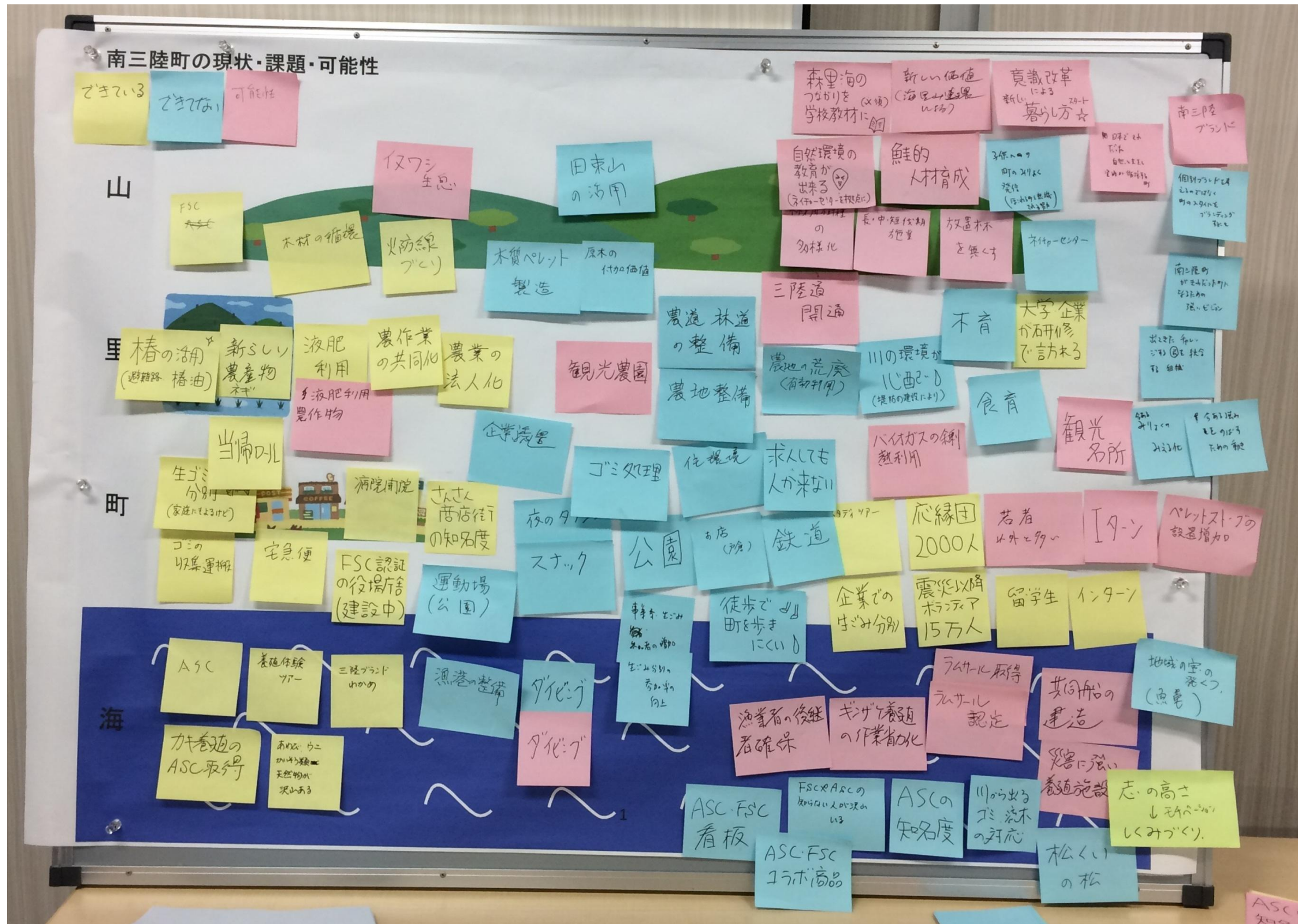


別紙 1-2 持続可能な地域の定義 (文書・捕捉)

- 子どもが生まれる
- 資源が枯渇しない
- 多様性
- 雇用の創出・産業・仕事・地域経済
- 再生可能・繰り返し巡る
- 知恵をつなぐ
- 災害に強い
- 自給自足
- 自然を劣化させない。われわれが自然から享受していることを未来の子どもたちも享受できるようにする
- 自然共生・自然を維持発展させる
- 思いやり (森の人、海の人、里の人がそれぞれ思いやりをもって関わる)
- 地域の中でお金がまわる
- 人が集う
- 歩み続ける
- 新しい発想
- 新しい技術
- 笑顔
- 誇れる町
- 知恵・知識
- 世代交代ができる
- 若い人が稼げる・若い人の収入がある
- 住民の主体性
- 商店街など店がある (賑わい)
- 危機感
- ビジョン
- 活力・情熱
- 研究 (掘り起こし)
- 健康
- 戦略
- インフラ (流通も)
- 住む場所
- 学ぶ場・教育
- 生産力

- 多種多様な職業
- 愛
- 感謝
- 自然環境
- 人
- つながる力 (町を訪れた人のハートをつかむ力)
- 地縁
- 資源
- ソフト力

別紙 2-1 南三陸町の現状・課題・可能性 (写真)



2-2 南三陸町の現状・課題・可能性 (文書・捕捉)

領域	できている(実績)	できていない(課題)	可能性
山	<ul style="list-style-type: none"> ・FSC認証取得 ・木材の循環(加工から使う人までつながっている) ・火防線づくり(これがあつたからこそ生息していた生き物、イヌワシなどがいた) 	<ul style="list-style-type: none"> ・木質ペレットの町内製造 ・原木の付加価値化 ・木育 ・田束山の活用 ・松くい松など流木を生まない対策 	<ul style="list-style-type: none"> ・イヌワシ生息 ・放置林を無くす(面積が狭いため実現できる) ・長・中・短伐期施業(山が低く扱いやすい) ・木材樹種の多様化
里	<ul style="list-style-type: none"> ・生ごみから生まれた液肥利用 ・新しい農産物(ネギ) ・椿の活用(避難路・椿油) ・農作業の共同化による農地維持 ・農業の法人化 	<ul style="list-style-type: none"> ・農道・林道の整備 ・農地整備・利用 ・川に生息する生物への配慮・保護 ・食育 	<ul style="list-style-type: none"> ・液肥利用した農産物の拡販 ・観光農園
町	<ul style="list-style-type: none"> ・生ごみ分別(家庭・事業所) ・液肥を使って栽培された作物の商品化(当帰ロール) ・さんさん商店街の知名度 ・FSC認証の役場庁舎(建設中)公共建築物で全体認証は日本初。 ・病院開院 ・宅急便 ・ゴミの収集運搬 	<ul style="list-style-type: none"> ・生ごみ分別の参加率向上(家庭、事業系) ・企業誘致 ・運動場や公園の整備 ・ゴミ処理(町外で処理) ・住環境整備 ・商業施設の整備 ・夜のタクシー ・スナック等夜の遊戯施設整備 ・安心して町を歩けるハード面の整備 ・鉄道の復旧 	<ul style="list-style-type: none"> ・バイオガスの余剰熱利用 ・ペレットストーブの設置者増加
海	<ul style="list-style-type: none"> ・ASC認証(日本初・唯一) ・養殖体験ツアー ・ワカメの三陸ブランド化 ・アワビやウニ、海藻類などの天然資源を多く有する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ASCの知名度向上 ・漁港の整備 ・川から出る流木などゴミの対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・ラムサール認証取得 ・ダイビングツアーの復活 ・後継者確保 ・災害に強い養殖施設 ・船の共同建造 ・ギンザケ養殖の作業省力化
共通領域 (全体)	<ul style="list-style-type: none"> ・スタディツアー ・大学・企業が研修で訪れる ・応援団2,000人 ・震災以降ボランティア15万人 ・留学生 ・インターン生 ・一次産業に意外に若者が多い ・志の高さとそれによる仕組みづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネイチャーセンターの復旧 ・募集しても人が来ない ・ASC・FSCの認知度向上 ・地域の宝の発掘 ・個別ブランドを増やすのではなく、町のスタイルをブランディングする ・今ある魅力の可視化 ・今ある強みを伸ばすための動き ・出てきたチャレンジする芽を統合する組織 ・南三陸町が際立った町になるための強いビジョン 	<ul style="list-style-type: none"> ・ネイチャーセンターを拠点とした自然環境の教育の実現 ・森里海のつながりについての学習教材化 ・鮭的人材育成(町に戻ってくる、町の価値を伝えられる人になる) ・若者の誘致 ・観光名所の発信 ・南三陸ブランド ・日本では際立った自然と共生しそれが循環する町 ・海里山連環による新しい価値創出 ・ASC・FSCのコラボ商品 ・個別の民間の取り組みをつなぎ南三陸の総合的な価値としていく ・意識改革による新しい暮らし方へのスタート ・三陸道開通